

山崎朋子

鳴潮のかなたに

伊号第六十七潜水艦とその遺族

山崎朋子

鳴潮のかなたに

伊号第六十七潜水艦とその遺族

文藝春秋

著者略歴

1932年生まれ。福井県出身。福井大学教育学部二部修了。小学校教師その他を経て結婚、結婚生活における女性の悩みから女性史の研究を始める。73年に『サンダカン八番娼館』で第4回大宅壮一ノンフィクション賞受賞。著書に『愛と鮮血—アジア女性交流史』『サンダカンの墓』『あめゆきさんの歌』『随想・胸より胸へ』ほか。共著に『日本の幼稚園—幼児教育の歴史』『光のかなれども—二葉保育園と徳永恕』



文藝春秋60周年記念

書下ろしノンフィクション

鳴潮のかなたに

——伊号第六十七潜水艦とその遺族

1983年10月1日 第1刷

著者 山崎朋子

発行者 半藤一利

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町 3—23

電話 東京03(265)1211(代)

定価 1100円

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 大口製本株式会社

©Tomoko Yamazaki 1983 Printed in Japan

万一落丁乱丁の場合はお取替えいたします

鳴潮の
かなたに*
目次

語り尽きぬ夜を——プロローグ——

7

伊号第六十七潜水艦

21

〈父〉を求めて——わたし〃山崎朋子——

45

「鳴潮」はるかに——わが母〃大畑晴子——

61

みんなみ
南みなみの海うみの底そこひに

99

焼野のきぎす夜の鶴——山口ツエと叶ギン——

123

焼野のきぎす、もう一羽——西口たまはと五人の子ども——

149

妻の道、いまひとたびの——小西正子——

173

海の嘆き、ふたたびの——浦口カイノ——

201

自立への遙かなる道——井村マキと梶田初子——

239

芦折れぬ——なお、梶田初子——

267

爆心地の菩提樹——松崎宮子とその子——紀子——

283

葉月^{はづき}十五日の海——エビローグ——

313

あとがき

329

A 装
D 幀
坂 上
田 笙
政 一
則 郎

書下ろしノンフィクション

鳴潮のかなたに――伊号第六十七潜水艦とその遺族

語り尽きぬ夜を

——フロローグ——

南の海の気圧配置がよくなかったからだろうか、その日の空はうすぐもりで、左手にひろがる別府湾は鈍色に風ぎ、わずかに群れ飛ぶかもめの羽足も心なしかおそかった。右手のはるか前方には、九州の脊梁山脈が別府湾へなだれる前の最後の高まりともいふべき鶴見岳と由布岳が望見されたが、山容峨々たる鶴見岳も豊後富士とも呼ばれて美しい由布岳も、あるいは濃くあるいはうすい霧の衣をまとっていて、その全貌を示してはくれない。

けれど、そのような眺めだったからではなかったろうか——わたしが、国東半島の東南端に位置する大分空港より別府市に向かうバスのなか、立ちこめている忘却の霧をかきわけかきわけ、少女だった頃の、とある一日を思い起こすことができたのは。しかもそれは、ほかでもない、わたしの今まさに訪ねようとしている別府において、めずらしく父と一緒にすごすことのできた一日だった——

——あれはたしか、昭和十五（一九四〇）年の夏休み前の六月のことだったと思う。わたしは小

学校の三年生。軍港として知られた広島県の呉市に住んでいたが、平素は母とわたしと妹の三人暮しで、父の姿は時々しか見られなかった。というのは、父は海軍軍人で、それも陸上勤務ではなくて潜水艦長をしていたからだ。

それでも、乗り組んでいる艦の籍が呉鎮守府にあったなら艦は呉港に居ることを原則とし、したがってわたしたちは、父と一緒に暮す日を多く持ったにちがいない。しかしそのころ父の乗っていた艦は、遠い九州の佐世保鎮守府に所属しており、そのため父は、一年のうちほんの時たましか帰宅しなかった。自身の任地が佐世保だったのにわたしたち家族を呉に置いたままだったのは、遠からず呉鎮守府へ転任になると思っていたからか、それとも、日本の西のはずれの佐世保よりは広島に近い呉の方が、わたしと妹の教育のために良いと考えていたからだろうか。そして父は、艦の寄港地と日時とがわかると、「幾月幾日、どこそこへみんなやって来るように——」と手紙を寄こし、わたしたちは母に連れられてその地へ行き、父との団欒だんらんにひたるのが習いとなっていたが、その時は温泉の街、別府を指示して来たのだった。

一歳違いの妹とわたしとは、お揃いで作った朝顔の花模様のワンピースを着、これもお揃いの籐製の小さなバスケットを手にさげて、嬉々として汽車の座席におさまった。妹が帽子をかむっていたかどうかおぼえていないのに、わたしが大きな鍔つばのついた白い帽子を頭にのせていたことをはっきりと記憶しているのは、その帽子が父に買ってもらったものであり、その意味で「お父さんの帽子、お父さんの帽子」と呼んで愛用していたものであったからか。

別府での宿の名は「亀の井ホテル」で、すでに着いていた父が出迎えてくれた。その日より数日、父につれられたわたしたちは、地下から熱湯や熱泥を噴き出す凄惨な光景で知られるいわゆる

「地獄」をめぐったり、^{しお}四本旗山^{はた}の近くにある「楽天地」という遊園地へ行ったりしたのだったが、しかし、それらの印象はほとんど言ってよいくらい残っていない。そして鮮やかに脳裡にぎざまれているのは、宿の座敷にあぐらを組んで坐っている父の姿——浴衣^{ゆふた}の前をくつろげてうちわで風を入れながら、母とわたしと妹とを、本当に眼を細めて眺めていた父の姿なのである。

一夕、部屋付きの女中さんが、「お嬢さま方、お好きな料理がありましたらおっしゃって下さいね。何でもお作りしますから」と訊いてくれたとき、わたしは即座に、「鰯^{いわし}の煮たのが食べた——」と答えた。潜水艦長といえど海軍でも一応エリート層に属しており、一方鰯は下賤な魚と格付けされていたから、困ってしまったのである。父は苦笑いしながら母をふりかえって、「おい、晴子、鰯ぐらい、飽きるまで食べさせてやれよ」と言い、それを受けた母は母で、「変な子ねえ、白身のお魚より鰯がいいって利^きかないんだから——」と、わたしを軽くにらむようにしたのだった。

後になってかえりみれば、あれが一家の樂^{もど}いというもの——家庭生活の幸福というものであったのだと思う。父がいて、母がいて、わたしがいて、ひとつ違いの妹の千^ちいちゃん^{ちゃん}がいて、この世にひとつしかない宝物を貰ったというような嬉しきとは違うけれど、何ひとつ欠落感のない、しっかりと落ちついて満ち足りた気持。多くの人が、気儘氣隨に生きる自由を捨ててまで結婚をするのは、こうした心やすらかな境地に終生わが身を置いていたいからであるかもしれない。そして、小学三年生だったその時のわたしにだって、たしかにそれと意識することはできなかったにせよ、自分はいま父母の双方に見守られて在るのだという安堵の思い——換言すれば一家団樂の幸福感が、小さな胸いっぱい^{いっぱい}に満ちていたのである。

だが、そのしあわせの失われるのは早かった。わずか二箇月の中には、父の姿はわたしたちの前から永遠に消え去ってしまい、別府行き折にわたしたちのかむった大きな鏢のある「お父さんの帽子」は、本当に父の愛情の形見となってしまったのだ——

立ちこめている忘却の霧をかきわけかきわけ遠い日の思い出をふりかえっているうちに、大分空港よりわたしの乗ったバスは、いつしか別府市内にその車輪を乗り入れていた。めざすホテルの名を挙げて尋ねると、運転手は、終点である国鉄駅前まで行くよりも旅行センター前で下車した方がよいと言うので、わたしは彼のすすめに従った。そしてそこでタクシーを拾って、市街地より少しはなれた高台にあるという某ホテルへ向かったのである。わたしより先に到着している人があるかしら——と気づかいながら。

記すのがおくれてしまったけれど、その日と時刻は、昭和五十六（一九八一）年八月二十九日の正午過ぎ。夏休みは終わったも同然というのに、観光保養地として有名な別府の地へ、遠い東京から、一体何のためにわたしはやって来たのであろう。そして、このわたしより先に到着していたらと気づかわねばならぬ人びとは、はたしてどのような人たちなのであろうか。

一言にして言うてしまうなら、それは、わたしの父が艦長をつとめていた潜水艦の乗組員たちの遺族である。その遺族の方たちとともに、故人たちの四十回目の忌日に法要をいとなむためである——と言えば、さらに精確であるかもしれない。

わたしの小学三年生の夏の別府行きは、さきにも記したとおり昭和十五年六月のことだったが、その二箇月後の八月二十九日、父の指揮する潜水艦は艦隊演習中に行方不明になるという宿運に見舞われた——八十九人というおおぜいの士官や兵士を乗せたままにである。海軍省は〈沈没〉

したものを見なし、乗組員については殉職のあつかいをして決着をつけたけれども、艦の沈没が確認されたわけでもなければ、ひとつの遺体、ひとつの遺品が収容されたわけでもない。したがって遺族たちは、自分たちの父や夫や息子たちがもはやこの世に亡いのだと一応は信じつつも、なお、もしかするとどこかの無人島へでも漂着して生きていることだってあるかもしれない——と思わないではいられなかった。

しかし、そんなふうに思えたことが、はたして良かったのか悪かったのか。人間の死というものが絶対に取返しのできぬ事態であってみれば、万分の一、千万分の一でも生存の可能性があるということは、遺族たちにとって一面では限らない救いになると言ってもよいだろう。けれどもまた、その父や夫や息子たちを失ってもなお生活して行かねばならぬ遺族たちの現実在即してみると、繋がれた一縷の望みは、たとえば再婚など新たな境涯に進む際の「柵」となりかねず、その意味では大きな重荷となってしまうかもしれない。そして事実、不幸にも沈んだ潜水艦に乗り組んでいた兵士たちすべての遺族が、幾十年にもわたり、一縷の望みとその望みある故の「重い柵」のあいだで、その心と身を深く大きく労さなくてはならなかったのである。

このような深く重たい心身の荷物を背負うには、ひとりびとりよりは遺族すべての力を綱に合わせての方が良いと思ったからか、艦長夫人だったわたしの母「大畑晴子は、翌昭和十六年の春、『鳴潮』と名づけた遺族間の連絡雑誌を創刊し、また父の追悼集『水漬く屍』（昭和十七年・私刊）を出版した。『鳴潮』は、当初は少くも一年に一度は刊行するつもりであり、すでに太平洋戦争に突入していたにもかかわらず第三号までは出したが、戦争の熾烈化はそれ以上の続刊を許さなかった。

そして、追い討ちをかけて敗戦の激動と戦後生活の混乱。そんななかで遺族たちはばらばらとなり、他を顧みるとまてないままに歲月のみ流れ、遂には、太平洋戦争の直前に不測の沈没をした潜水艦とその乗組員のことなど完全に忘れ去られるに至ったのだった。

それより四分の一世紀以上の歲月を経た昭和五十五（一九八〇）年、七十歳を越した母は、老境に入って今更に亡き夫が偲ばれるのか、わずかな手がかりを頼りに遺族たちに連絡を取り、「鳴潮」の第五号を刊行した。その創刊号には亡没者八十九人のうち七十六人の遺族が文章を寄稿しているのに、第五号に通信を寄せている遺族は二十三人。そして母は、かつてその重荷を共に背負うべく親身にまじわった遺族たちといま一度逢いたいと思ったのか、翌年の祥月命日に一堂に会することを約束したのだった。——集る場所を別府と決めたのは、そこが温泉の町であってくつろげるからでもあったが、遺族の多くが九州方面の住人であり集合に都合が良いと考えたからである。

そうして、一年がまたたく間に終って昭和五十六年の八月二十九日が近づいたが、思い設けず、母は病床に臥す身となってしまうていた。そこで長女のわたしが、母の名代として出席することとなり、はるばる別府へと飛翔し、いま、ようやく、空港よりのバスをタクシーに乗りかえて、遺族たちと落ち合う約束のホテルへ向かったというわけなのだった——

タクシーは十分ばかり疾走して、高台にあるホテルに着いた。玄関の前は広い庭となっており、そこに立つと市街地が一望のもとに見下され、いかにも南国らしいフェニックスの木の特徴的な葉合いを縫って、温泉の湯煙があちらからもこちらからも立ちのぼっている。しかし、それに眼をなごませるとまもなくフロントを訪^{おもて}なうと、すでに到着している遺族があるという——新婚

数箇月にしてその夫を失ったと伝え聞く人とその義妹にあたる方とお二人である。その住居が熊本県にあり、九州を横断して来るだけでよかったため到着が早かったのだろうか。

会場に宛てられた部屋へ通って挨拶をかわし、しばし雑談に時を忘れていると、ちらほらと幾人かの人がやって来られた。いずれも老境にさしかかった婦人方であって、わたしが初対面のつもりで言葉を陳べるのに、「——いいえ、朋子さん。あなたには、まだお小きかった頃に何回か逢っていますよ」と微笑まれる方もあった。そうしてそれからおよそ二時間ののちには、多くは九州一円から、遠くは近畿・山陰地方から、合わせて十人の遺族が参集し終ったのである。

呼びかけた二十三人の遺家族のうちから十人の参加者というのは、出席率が高いと見るべきかそれとも低いと見るべきか。その十人の方の間わず語りの裡に洩れたところによるならば、欠席者のなかには、日々の仕事その他がいそがしくて止むを得ないという人のほか、老来しきりに足腰が痛んだり高血圧症になったりして旅行に耐えられないという人が、ひとりふたりにとどまらないということだった。わたしは、四十年という歳月の長さで重さを、あらためて感じないではいられなかった——

かくして参集したわたしたちは、三々五々連れ立って鉄輪の永福寺という寺に向かった。——その寺において、亡没した八十九人の人たちの御霊をなぐさめる法要をいとなむことを予定していたからである。

鉄輪は、鶴見岳の麓にあって、別府・亀川・柴石・明礬・観海寺そのほかとならべて鶴見八湯と称される温泉のひとつで、西方に熱湯や熱泥を噴き出すいわゆる「地獄」群を控えているせいか、いたるところから天然の蒸気を立ちのぼらせている街だ。九州横断道路の少し先で右折して、

自動車一台がようやく通れるほどの敷石道を海岸の方へ下って行くと、間もなく左側に見えて来た小ぢんまりした寺が温泉山永福寺であった。

可愛らしい山門の脇に建てられた案内札の文章によれば時宗じしゅうの寺の由だったが、時宗とは日本浄土教の一派で、宗徒は「臨命終時」を事としての修行——すなわち平生を臨終と心得て念仏をし、宗主は諸国遊行と勸進賦算に従わねばならぬ掟を持っている。亡没の刹那しじなまでそのような事態が突発しようなどと露思つゆっていなかったにちがいない八十九人の潜水艦乗りたちの御霊には、「臨命終時」を本願とする寺での法要は、この上なくふさわしいと見なくてはならないだろう。そしてわたしたち遺族は温泉山永福寺にほとんど何の縁ゆかりりも持たず、寺側よりすれば過ぎ行くひと群むれの旅人にすぎなかったのだが、しかし宗主に行手を定めぬ回国の旅の課かされているという宗派に属する寺であってみれば、わたしたちのこの寺での法筵ほふえんは、これまた似つかわしいと言っさしつかえないのではあるまいか。

本堂へ通されたわたしたちの待つ間しばし、まだ若い住持が眼もさめるような青色の袈裟けさ姿で立ちあらわれ、座に就くとやがて読経よみきやうがはじまった。經典に関して教養のないわたしにはわからないが、浄土教の一派たる時宗なのだから、おそらくは「阿弥陀經」の一品いっほんを読誦どくじゆしているであろう。若い朗々たる声が本堂いっぱいひびきわたり、その声の切れ目切れ目に、木魚の低い音と、銅鈺どうじゆの長く尾を引く金属的な中音と。そして居ならぶわたしたちの前には、いわゆる内陣ないじんがあつて華鬘けまんとや瓔珞えいらくがはなやかに垂れ下がり、その奥には拈華微笑ねんげふみしやうの阿弥陀仏が立っておられ、暗いだけに幽玄のおもむきがあり、一同が焼香してその涼やかな香りがあたりにただようと、いよいよそのおもむきが濃くなつて行つたのだつた——